水稲栽培の次世代育成支援

■　高松市・三木町の水稲生産者　■

（東讃農業改良普及センター　間島正博、○六車桂）

●対象の概要

高松市・三木町の水稲作付面積は、年々減少し、令和３年産で約2,880ha（推計）となり、この５年で約450ha減少した。認定農業者や集落営農組織等への集積は進んでいるものの、作付けの約75%を担っているのは、主に高齢の小規模、兼業農家である（表－１）。また、栽培技術や水利慣行についても、家庭内、集落内で十分に伝承されないまま、次世代が栽培している場合が見受けられる。

表－１　水稲作付面積の推移　（単位：ha）

	H29産	H30産	R元産	R2産	R3産（推計）
高松市	2,670	2,570	2,450	2,350	2,299
前年差		-100	-120	-100	-51
三木町	659	633	611	589	577
前年差		-26	-22	-22	-12
計	3,329	3,203	3,061	2,939	2,876
前年差		-126	-142	-122	-63
認定農業者 R3年産作付面積（JA出荷契約時面積）					505
集落営農組織 R3年産作付面積（普及センター調べ）					188
認定農業者・集落営農組織が担う割合					24%

※作付面積：(H29産～R2産)農林水産関係市町村別統計
(R3産)農業生産流通課調べ

●課題を取り上げた理由

理想は、地域の担い手である認定農業者、集落営農組織への集積を進め、水稲の作付面積を維持・拡大するとともに、担い手の所得向上を図り、それが後継者に引き継がれる、という流れである。しかしながら、米価の下落、田園地帯の混住化による水田面積の減少等から、営農環境の悪化が進んでいる。

また、最近、水稲に関する質問や相談に対応していて感じるのは、基礎的、初歩的なことが分からず作付意欲が低下していることである。このため、基礎から水稲栽培が分かるように支援することも、次世代の育成につながり、水稲作付を維持する一助になると考えた。

●普及活動の経過

1　関係機関との連携・企画

JA中央地区営農センターと協議し、香川地区（香川町・香南町・塩江町）を中心に、初めて水稲栽培に取り組む生産者にも分かりやすい講習会を開催することとした。まず、幅広く周知することが重要と考え、案内文を集落ごとに各戸回覧し、東讃普及センターの公式LINEでの通知、現役の担い手から子や孫等へも参加を呼び掛けた。

2　夏期の水稲栽培管理講習会の開催

当初予定していた普通期水稲の田植え前の講習会は、コロナ感染者数の増加により断念したが、感染者数が減少した８月７日に、ようやく開催できた。当日、主の生産者に加えて、30～50代の若い世代、母と娘、祖母と孫の組み合わせ等、これまでの平日開催の講習会では見られなかった様々な世代の参加があった。講習会では、なるべく多くの実物（穂肥施用適期の株、罹病株、トラクターやコンバインの実機等）を見せ、標準的な生育のほ場も案内して、初心者にも分かりやすく工夫して説明した。そのほか、現場でも使えるよう耐水性の下敷きタイプの穂肥診断・収穫適期の判定シートを作成・配布し、参加者から好評を得た。

夏期の水稲栽培管理講習会

また、講習会後の個別相談では、次のような具体的な質問を受けた。

・基肥はいつ施用するのか？
・スクミリンゴガイが防除できないのだが？
・除草剤の効果的な使い方は？
・いもち病と紋枯病の違いは？
・間断灌水と中干しの違いは？　等

穂肥診断・収穫適期判定シート

3　「令和４年産水稲栽培しおりを読み解く会」の開催

夏の講習会後、日々の普及活動のなかで、生産者の家族（今後、農作業を引き継ぐ立場の人）とも積極的に会話するようにした。すると、この作業がどんなものか、なぜ今する必要があるのか知らないまま手伝っている人が多いことが分かった。そこで、毎年JAが発行（普及センター監修）し、水稲栽培のイロハを一枚に網羅した「水稲栽培のしおり」について理解してもらう講習会を12月18日（土）に香川地区で開催した。

夏の講習会の時と同様、初心者を含めた生産者に幅広く周知した。当日は、共働き夫婦、退職後本格的に栽培を始めた人等、栽培歴が浅い人に加え、現役の担い手も参加し、熱心に聴講してくれた。

「しおり」は専門用語が多いことから、肥料、農薬の実物や出穂期判定の写真等をふんだんに使い、普及員とJA営農指導員が平易な言葉を選んで解説した。また、普通期水稲で被害が拡大し生産者からの相談が多いスクミリンゴガイ対策についても、秋冬期にできる防除対策に関するチラシを用いて具体的に説明した。

約150分通しの座学講習会にも関わらず、参加者の反応は上々で、「稲作の流れが分かった」、「水管理や出穂期の把握など今まで曖昧だったことが解消できた」、「長年栽培していたが、間違いに気がついた」等の感想が聞かれた。また、後日、普及センターにお礼や追加質問の電話やメールが届き、反応の大きさを感じた。

「令和４年産水稲栽培しおりを読み解く会」

●普及活動の成果

1　今回、香川地区を中心に夏期及び冬期の講習会を実施し、コロナ禍にも関わらず約100名の参加があった。また、目標としていた水稲作付初心者への講習もでき、理解を深めてもらうことができた。

2　後日、現役の担い手達からも「自分だと経験だけに拠った説明になりがち」、「実の親子や近しい関係だとどうしても余計なことまで言ってしまい、うまく伝えられない。このような機会は必要だ」と肯定的な感想をいただいた。

●今後の普及活動の課題

今後も、十分な技術の伝承もなく米作りを引き継ぐ事例が増え、作付減少の大きな原因となることが予想される。これら初心者の疑問や悩みに応えられる場として、今回の講習会のような基礎から学べる機会の提供が課題であり、今回の香川地区での経験をもとに、高松市・三木町内の他の地域でも実施が必要である。

また、講習会の実施方法については、実際に集まり、ほ場や実物を示しながらのやり方が最適であると考え企画したが、終息しないコロナの影響で、開催の可否を悩むことが多かった。高齢者が多く、ハード面等の様々なハードルはあるが、確実な手段として、オンライン講習会の実施体制の整備やSNSによる情報提供の充実を図る時期がきていると考える。

今後、従来方式とオンラインを活用した方式の講習会、情報提供を組み合わせ、水稲生産者の作付意欲の下支えとなるよう活動したい。